

—Ghost Blues に寄せて—

2007 年、祖父がガンのため他界した。この曲を作ったのはお葬式の前日です。

死んでからでは遅いのですが、恥ずべきことに祖父に感謝を伝えることが一度も無かったことに気づかされる。

もしかしたら、それが祖父が最後に教えてくれたことなのかもしれない。

自分が日々何気なく好きなことを弊害無く出来る凄さや、追いたい夢を追える凄さ。

家族が居る凄さ、友達が居る凄さ、帰るべき場所や自分の居場所がある凄さなど、こういった当たり前を僕にプレゼントしてくれたのは、紛れも無い先祖たちである。僕は『当たり前』の対義語は『感謝』だと真剣に思っている。

どんな素晴らしい目標を持とうが、どんなに素晴らしい夢を持とうが、その日々が当たり前になってしまったらいけないのではないだろうか。

当たり前の前に感謝すべきことがたくさん溢れていることに気づけるように、この『Ghost Blues』に総てを込めました。

先祖が当たり前に来出来なかったことを感謝しながら出来るようになりたい。



過去を変えずに未来を変える！ LOOK BACK! ~原点に帰ろう~



Ghost Blues

*迫り来る明日 何を残す 耳澄ます微かな Ghost Blues
ふと思い出す 手と手合す 語りかけてくれる Ghost Blues
涙流す 汗を流す 命の数だけ Ghost Blues
ずっと照らす 手と手繋ぐ 月明かりが示す太極 Truth

ハラボジ(祖父)が言っていた「切って貼ったような人生だった」って 14 で日本に渡った たった何秒かで人の命を奪った 次の言葉が僕の心に突き刺さった
「弾薬を工場で作ったのは私だった」と告白し乾いた頬に涙が伝った
一日中 夢中 向き合った機関銃 でも本当に求めているのは自由
群青の空の下 生きていることが勲章 酷い雨が身を打つ 拾い集めた鉄屑
親父が継いだ岡本機器製作所 町工場 墓場 減びゆく状況
辛い車椅子ライフ 片目は見えない 煙草も吸えない このホスピスで
俺の顔見て「パンモゴンナ?(飯食ったか?)」こんな状況で人の心配だもんな
あんた本当にどうしようもねえ大馬鹿野郎さ「悪口は言わず丸く小さく生きていけ」
搾り出す一言がパンチライン 笑う恥じらいの無いアインシュタイン
右向け右 走り続けたゴーストの記憶は脆く記録にはならない
ハラボジが言っていた「切って貼ったような人生だった」って でも「良い人生だった」って *

ばあちゃんがじいちゃんの話を知った 骨埋める覚悟で日本に帰化した
やった喫茶店 パイブ店 焼肉屋 聞いたよ自営業のやりにくさ
毎朝公園へ散歩しに行った大きな頑固じい
日本で必死に頑張った が耳にした病名はガンだった
留学行く前言うと思った「世界を知ってこい」
でも俺を見て一言言ったただ「元気で行ってこい」
なら俺の元気な姿を見てみる 悔しかったら起き上がって来してみろ
もらっちゃったねハゲる DNA あんたに似ないと良いですね
じいちゃんラップって知ってるか ばあちゃんはダジャレって言うてるが
主張すんだよマイクを手に取り 面白いんだぜ時代劇より
あん時あんたが死んだ 初めてあんたの強さを知った
あの時代を生き抜いた人生 偉いし 今度行くよ墓参り
*
何気なく日々言った 言葉が一番心に響いた
精一杯、目一杯生きてくよ それが俺なりにできる 供養
いつの事だろう 吐いた言葉を聞き思った 強いつてどんなことだろう
死が近づいた やっと気がついた 俺は三日月だ いつか満ちた日が
来ること願って見上げる満月 容赦なく下される未完結な判決
いつか亡き人の努力が報われるとき 月と太陽が結ばれる
言葉聞き取れなかった最後 でも確かに受けた最高の愛を
誠実な態度で示したいよ 俺の背後で照らす太陽

歌詞の中で、韻を踏んでいるところを赤字にしています。

講演：人権 / 平和 / いじめ / 夢

あきらめない心

世界最高峰の神技的パフォーマー

ちゃんへん。



在日三世に生まれ、その壮絶な生い立ちをせきららに語る。
世界レベルのパフォーマンス・講演・ラップを披露。
そして・・・私たちには感動と生きる力が残った。

国籍・いじめ・目標・夢・
挑戦・栄光・挫折・蘇生
すべての過去を受け入れて・・・
現在の自分と共に歩もう

お問合せ
お申込み

セントラルプロモーション(セントラル映電株式会社内)
TEL 06-6641-3822(代表) FAX06-6641-6561
〒556-0016 大阪市浪速区元町1丁目1番20号
新賑橋ビル5階
E-mail: info@central-eiden.com
URL: http://www.central-eiden.com

★第1部★ パフォーマンス
約30分

【ちゃんへん、プロフィール】

1999 年、中学 2 年生の時に自らパフォーマーを志し、独学で芸や技を学び、アマチュアパフォーマーとして活動始める。
日々の練習を積み重ねた結果、一年後には地域のイベントなどに出演するようになり、地元では名物少年になっていた。そんな中、彼の名を世に知らしめたのは、高校 2 年生の時に出場した大道芸ワールドカップ 2002 であった。最年少 17 歳という若さでの出場だったが、観客による投票で 1 位を獲得し、同時にプロパフォーマーとなった。

2003 年にも同大会に出場し、2 年連続で投票 1 位を獲得する。

2004 年、高校卒業後は海外を中心に活動を始め、これまで世界各国で公演を行った。北野武、デズモンド・ツツ、マイケル・ジャクソンなど、各界の著名人の前でもパフォーマンスを披露する一方、餓えや貧困、紛争や難民などの問題を抱える国や地域でも積極的にパフォーマンスを行った。
それまでの彼は、パフォーマンスで世界を救うという考えを持っていたが、南アフリカではまだ残っている黒人差別を目の当たりにし、ブラジルでは鉛筆を握りたいが銃を握るしかできない選択肢の少ないギャングたちと触れ合い、パレスチナでは目の前で子供の頭を銃で打ち抜かれる瞬間を目撃し、政治で出来ないことが芸術で出来るという考えに変わった。

2008 年、活動の場を日本に戻し、学校・行政・企業等でジャグリングショー & 講演会を行うようになる。
また、2009 年には東京ディズニーリゾート、大阪ユニバーサルシティとの専属契約を交わし、2010 年には、第50回ムーンパフェスティバル in メルボルンにて最優秀パフォーマー授賞。

現在、イベント出演はもちろん、学校行事の芸術鑑賞会や人権学習などでも幅広く活動し、国内外を問わず、年間 200 以上もの公演を行う業界屈指の世界的パフォーマーである。



★第2部★ 講演
約60分

失敗しない人間より、諦めない人間に成る。

朝鮮人としてウトロに生まれ、厳しい家庭に育てられる。
小学校の頃に朝鮮人という理由でいじめを受け、次第に「自分は世の中に必要のない存在なんだ」と考え始める。そんな生きる目標すら持っていなかった彼を打ち砕いたのは、中学 2 年生の時に出会ったジャグリングだった。このジャグリングによって、人生で初めて喜びと感動を知る。毎日 8 時間以上の練習をし、渡米への想いが強くなるが、渡米の想いを阻んだのは、国籍という壁であった・・・
軽妙ながらも全力で生きてきた彼のばらまく言葉を受け止めて下さい。



★第3部★ ラップ
約10分

当時、ラップをほとんど知らなかった僕にとっては斬新な文化であり、興味を持たない理由など皆無であった。
そう思う最中、ある小学 4 年生の子が僕に告げた。
「僕たちの先祖は、白人によって読み書きを禁止されていたんだ。自分たちの歴史を書き残すことができなかったの、先祖はリズムカルに語り継ぐ事を選んだんだ」
衝撃だった。同時に僕の知識欲が爆発し、その少年にありとあらゆるラップの魅力を学ばせて頂いた。
ラップには元々メロディがない。その代わりとしてラップにはライムとフロウが存在する。
ライムとは、漢詩でいうところの韻であり、詩の部分部分で文字数と母音を合わせることである。
そしてもう一つ、フロウとは歌いまわしのことであり、声のキーや速度に変化をつけてライムに合わせる。
ラップとは、黒人差別の象徴的存在であり、手足を縛られていた奴隷制度の権力に負っていた黒人たちにとっては、唯一、お金がなくてもできた娯楽であり、希望であり、生きる証であり、そして、問い掛ける武器だったのかもしれない。

第2部の後、講演の内容を投影したラップを披露する。

自身の孤独な小中学生時代を等身大で表現した代表曲『根無し草』。

そして、祖父の波瀾万丈を詠み上げた集大成的作品『Ghost Blues』をご清聴下さい。

資料

『ウトロ - 見えない人々の歴史 -』

京都府宇治市に「ウトロ地区」と呼ばれる地域があり、ここには在日コリアンのみが多く住んでいました。
1938 年、日本全国の各地に飛行場と航空乗員養成所を建設する構想が発表され、一年後には京都飛行場と関連施設の建設が計画されました。日本全国の各地に飛行機の拠点を作ろうというのは、紛れもなく戦争遂行のためでした。当時の国策に従い、その建築土木現場には朝鮮人労働者が多数集まり、家族とともに建設現場内の飯場小屋で生活するようになりました。
これがウトロ地区の始まりです。



1945 年に日本が敗戦を迎えると、京都飛行場の建設計画は中止となり、その敷地はアメリカ占領軍に接収されました。しかし、ウトロの飯場は接収されなかったため、在日コリアンとその家族は、引き続きウトロ地区に住み続けました。祖国への帰国運動が進む最中、祖国で朝鮮戦争が勃発し、南北分断の悲劇を迎え、朝鮮戦争は現在も休戦状態。仕事がなくなり、行き場所もなく、本国に帰国することすらできない在日コリアンたちが、過酷な戦後をこの地域で生きることとなったのです。そのため、飯場小屋を改修し、堀立小屋を作り、徐々に住めるようにしていきました。しかし、元々は工事現場の飯場跡のため、居住環境は劣悪でした。堀立小屋の家は、雨が降れば雨漏りをバケツで受け、傘を室内でさしながら夜が明けるのを寝ずに待つということもありました。水道も通っておらず、水道管の掘設工事が行われたのは 1988 年になってのことでした。
どん底の生活を送りながらも、その環境をくぐり抜け、生き抜き、そして自分たちの「まち」を作り、守ってきました。

